

蛇の執念（筑前）

筑前博多の町でも指折の資産ゆたかな呉服屋の主人夫婦は人々から尊敬されて、何一つ不自由もない身の上ではあつたが、この夫婦の胸の裡は貧乏人のそれよりも遙かに寂しかつた。夫婦の者は人さえ見れば、その寂しさを訴へた。

「お蔭様でこのやうに店は繁昌いたしますが、幾ら店が繁昌しても幾らお金が出来ても、私等には何より大切な子寶と云ふものがまだ有りません。世の中で一番の貧乏人は私等のことです」
けれども是ばかりは人間の力で何うともする事も出来なかつ

たので、氣の毒だと思ふだけで人々も慰める言葉がなかつた。
ところが主人が五十二、お上さんが四十四になつた時、お上さんは時々庭へ下りてはそつと青梅の實を取つて食べるやうになつた。

「えッ、何？ 妊娠だつて、子供が出来たのだつて、あの私の家内の腹に、あの子供が出来たのだつて。」

お上さんの青梅を食べてゐる姿を見て、主人は悦び叫んだが、今度は青梅などをお上さんが無暗に食べて、腹の子供に害があつてはと思つたので、

「オイ、お前そんな所で青梅なんぞ食べて居ると蛇が出るよ。早く此方へお出で。」と云ふと、

「あれ、蛇がッ。」と叫んで、お上さんは顔色を變へて座敷へ駆け上つた。蛇と主人に言はれて、何氣なく足許を見ると、一匹の小蛇がチツとお上さんの方を眺めて鎌首を持ち上げてゐたのである。お上さんは美しかつた。

けれども何事も其後なく、お上さんは月満ちて玉のやうな女の兒を無事に生んだ。主人は勿論、一家の喜びは此上もなく、只可愛がつて育てゝゐた。

その内に娘はだん／＼美しく生長して十三の春を迎へた。娘の美しさは博多中の評判になつた。主人夫婦は一にも娘、二にも娘で、人の顔さえ見れば娘の自慢をしてゐた。

或日娘は庭の池に、乳母を相手に笹舟を浮かべて遊んでゐた

が、突然乳母に絶りつくど、

「あれ蛇が、乳母よ。」と泣き聲を立てた。見ると、叢の中から一匹の小蛇が鎌首を持ち上げて、チロロと赤い舌を吐きながら眠と娘の美しさに見惚れてゐた。

「あれ、厭な蛇だよ、叱ッ、叱ッ。」

と乳母も吃驚して、惶て、小蛇を追つた。

その夜から、小蛇は娘の枕元に現れては、娘の美しい寝顔を見つめるやうになつた。娘は夜中になると、恐ろしい夢にうなされては、

「あれ、蛇がッ。」と脅え上つては泣き出した。

けれど不思議のことには、この小蛇は外の者の眼にはどうし

ても見えなかつた。見えるのは娘の眸にはかりだつた。主人夫婦はそれを我身の苦痛よりも嘆き悲しんで、あらゆる加持祈禱に金も惜しまず盡したが、何の効果もなかつた。

娘の顔色は日増しに蒼くなり、さうして三年の月日が暗く経つた。

その時恰度、入唐の目的で博多へ来て、風待ちをしてゐたのは道元和尚だつたが、主人夫婦の嘆きを訴へられて不愍に思ひ或日訪れて娘の室に入った。そして几帳の蔭に隠れて待つてゐると、やがて其夜中頃、チヨロロと小蛇は娘の枕元に匍ひ寄つて、チツと鎌首を上げて娘の寝顔に見惚れだした。娘は苦しさにウン／＼身を悶えた。

道元和尚は此時不意に几帳の蔭から現れると、サツと開いた。扇子を蛇と娘との間に立てた。扇子には美人の繪が描いてあつた。蛇はその繪に見とれた。その暇に和尚は隠し持った剃刀でザクリと蛇の首を斬り落した。それから娘は無事に育つた。

稚兒ケ淵 (相模)

昔、鎌倉建長寺の廣徳庵に、自休藏主と云ふ僧があつた。奥州信夫の人であるが、故あつて鎌倉に足を留めて居た。或時宿願があつて江の島の辨財天へ參詣すると、計らずも山の中で一人の美少年に逢つた。自休は一目見るより慕はしく思ひ、何處の人であるかと僕に聞くと、當地の相承院に住む稚兒、名は白菊と呼ぶとの答へ。自休はそれから胸の思ひに堪へ兼ね、細々と書いた文を贈つたが、白菊からは返しがな。又贈つた。左様して五度も六度も續けたが、何んの音沙汰もなかつた。けれど

も堰かれて募るが情の道、自休の思ひは日に増し深くなり、手を變へ品を替へて云ひ寄つたが、依然應ずる氣色は見えなかつた。併し白菊とても決して情を知らぬ者ではない。或夜潜に暗に紛れて江の島へ行き、扇子を渡守に預けて、若し吾を尋ねる人あらば、此扇子を與へ呉れよと頼んで置いた。後を慕つて來た。自休渡守から受取つた扇子を開いてみると、二首の歌が書いてある。「白菊を忍ぶの里の人とは思ひ入江の島と答へよ」
「うき事を思ひ入江の島かげに捨つる命は波のした草」とあつた。扱は我故身を捨てたかと、自休は悲しさ遣る方なく、後を追ふて同じ淵に身を投げた。

小石供養（武藏）

武藏國川越の城址から、南方二丁許りの處に、よな川と云つて、武藏野の中を東に流れる小川がある。昔此あたりの百姓の娘に、鄙には稀れな麗しい女があつた。或時殿様の松平大和守様が鷹狂を遊ばされた時、娘はお供の武士に見染められ、妻として望まれた。娘の兩親は身分を思つて斷つたが、強つてと云ふ所望に黙し難く、娘は十六歳と云ふに、襦取姿も美しく其武士の家へ嫁入つた。そんな譯だから夫婦の間は睦じかつたが、如何しても姑との折合が悪く、花嫁の眼に涙は絶えなかつた。す

ると或日誤つて秘藏の鉢を毀したのが口實になつた、到頭實家へ歸された。女がそれを苦にして身を投げたのが此川の淵である。よな川と云ふ名は、其女の名のおよねから來たのである。今では狭い浅い川になつたが、處の者は矢張底知れず深いと云つてゐる。村の娘達は其處を通る度毎に、小石を拾つて投込むのは、およねの靈を慰めるため、「およねさアン」と云つて石を投込むと、奇妙な形の波紋が出來て、底からは泡沫が浮いて來る。而して石が底へ届いたと思ふ時分には、底の方で微かに「はあアい」と云ふ子供らしい、可愛い、女の聲が、如何にも悲しさに答へるのが聞える。

夜泣石 (遠江)

東海道金谷宿を南へ入ると、小夜の中山街道に出る。其道傍に卵の形をした大きな石が祀られてある。夜々悲しい聲を出して泣くので夜泣石と云はれてゐる。昔、姫姫の旅の女があつた。都の者であるが、東國にゐる夫を尋ねて遙々下つて來た。丁度中山へ掛つたのは日の暮、疲れた身を道の傍に休めて途方に暮れてゐると、盜賊が現はれて、女が涙と共に詫びるのも聞かばこそ、持つてゐた金銭を奪ひ、着物迄剥ぎ取つた上に、如何か生命だけはと手を合はせるのを見遣りもせず、無残にも女を切

殺して仕終つた。併し子供は無事に産れてゐた。男の兒であつた。女の一念は石と化して夜毎々々盡きぬ怨恨を泣叫ぶのであつた。男兒は里の嫗に拾はれた。嫗は大變優しい人だつたから、自分の産みの子にも増して不惑を掛け、乳の代りに手造の餵を食べさせて大きくした。夜泣石の傍で賣つてゐる中山名物の餵は、其名残である。子供は成人すると、嫗から身の素性を聞いて、亡き母を憐み、我身の因果を歎き悲み、それから口癖の様に「命なりけり小夜の中」と云つてゐたが、嫗が此世を去ると共に旅に出て諸國を歴廻り、遂に池田の宿で首尾よく親の敵を討つた。

宇治の橋姫（山城）

昔、宇治の里の司の長男に、何某と呼ぶ器量秀れた若者があつたが、其隣りに之れは又天人かと思はれるばかりの美女があつて、二人共土地の評判になつてゐる中、何日しか此美しい男は、睦ましい語らひをして、變るな、變らじと堅い約束を結んだ。すると男の家近くへ越して來た家にも一人の娘があつて隣りの女にも立勝つた艶麗さに、男は更に其娘にも心を通はせ以前の約束などは、とんと忘れて仕終つてゐた。先の女は此頃男の仕打の變つたのを可怪しく思つたが、他から一仕始終を聞

くど、血の涙を流して口惜しがり、能くもく、此身を欺きしよ
な、憎い男、此怨念晴さで置かうかと、直に家を飛出し、貴船
の社へ参籠して祈りを上げ、それから宇治の川水に、七日七夜
の間身を浸して、一心に祈念すると、神も哀れと思召されたか、
忽ち異形の悪鬼と化し、頭には恐ろしい二本の角さへ生えた。
そこで女は先づ約束を破った男を取り殺し、それから相手の娘
次に親戚と一家一門を残らず祈り殺したから、其怨霊を鎮める
爲めに、宇治の橋姫と祭つたのである。今も宇治では婚禮の時
に橋を渡らない様にしてゐるのも、其怨念を恐れてゐるからで
ある。

片目魚 (攝津)

攝津昆陽池の鯉鮒其他の小魚は、揃ひも揃つて片目のもの許
りであるが、土地では之れを神に祭つて、行波明神と呼んで居
る。昔、行基上人が、病氣に罹つて山中に倒れて居る男を見て
有馬の温泉へ連れて行つて遣らうとしたが、病人はもう體が疲
れ果て、居るので、一步も進まない。其時男は上人に向つて
「私は五六日物を食べぬから、何卒鮮魚を料理して食べさせて
下さい」と頼むので、上人は態々長洲の濱へ行つて魚を求め、
能く調理して與へたが、男は容易に食べないで「先づ試に上人

様が食べてみて下さい」と云つてゐる。素より情け深い上人であるから男の云ふ儘に自分が先に食べて見て、夫れから男に進めると、今度は又「私は瘡瘍が痛んで仕方がない、何卒膿を吸ひ取つて下さい」と云ふ。見るともう皮膚は腐つて臭氣は強く傍へ寄るさへ氣味の悪いの上人は少しも厭ふ様子なく、之れを吸はうとするや否や、男は忽ち金色の像となつて、成樂如來と現はれ「我は温泉山に居る者、其方の心を試んとて、態々病體の非人と成りたるなり」と云ひ終ると姿は消え失せた。上人は食べ残りの魚を手早く昆陽池に放してやると、化して片目の魚となつた。

七、輿山（上野）

高崎市の南、名高い多胡碑の東、一里許りの處に七輿山と云つて瓢形の塚がある、多胡碑の主を羊の太夫と云ふが、此羊の太夫と云ふ男は不思議にも多胡から、奈良の都迄、幾百里の道を毎日通つたので、時の帝から其忠義を褒められたさうだ、處で或日の事、羊の太夫は遠侍に晝寢をしてゐる舎人を見るときもなしに見ると、兩腋の下に羽が生へてゐる、此舎人は毎日馬の口を執つて都へ供をする男である。羊の太夫は何と思つたか、其羽を梳取つて知らぬ顔をしてゐた、處が其翌日になると馬の

脚が遅い、舎人も何日の様に走らぬ、十里も行く日は暮れて仕終つた。扱都では毎日伺候する羊の太夫が見えぬので、これは適切謀反に違ひないと、早速討手を差向けて其城を攻めさせた、羊の太夫も最早敵はぬと、七人の姫君を黄金の輿に乗せ、藁で包んで落して遣り、自分は一人腹搔切つて死んだ。けれども七つの輿は、まだ一里と行かぬ中に、敵の兵に追詰められ、姫君達の花の姿は、無残にも荒くれ男の太刀風に、散りて果敢なくなつたのであるが、其乗つた七つの輿は残つた七つの胴と共に、土地の者の情けで此塚に埋められた。七輿山の名はそれから起つたのだと云ふ。

鴻の巢社（下總）

昔、下總國に三つの社があつた、處が其社の上の大木の枝に毎年大きな鴻の鳥が巢を作つて、石龜だの蛇だのを喰ひ散して社壇を汚すので、村の者共は其掃除に手数が掛つて仕方がない併し鴻を追ふとしても中々逃げて行かないので、仕舞ひには腹を立て、社前へ行つて、『こんなに社を汚くされても、神様は何とも思はないのか』これでも此の社には神様があるのか』と、大きな聲で怒鳴つた。すると其夜の事村の者に神託があつた來る何日には彼の鴻の鳥を罰して遣るから、皆々來て見よとあつ

たので、近郷は云ふに及ばず、遠方の村里からも其事を傳へ聞いて其日には數萬人の群集が境内に集り、犇き合つて神の奇瑞を待つてゐた、懸て巳の刻ばかりになると、社の裏から八尺もある白蛇が紅の舌を出しながら、悠々として大木を登つて行く見てゐる數萬の人は、何れも神の威徳に打たれ、頭を垂れて伏拜んだ、處が其白蛇が木の半迄登つて行くと巢にゐた雌雄の鴻は、急いで白蛇を捕へて社の上に持つて行き、頭から食ひ盡して、残るは只骨許りにして仕舞つた、並居る人々は是れはくと驚いたが、それから、其鴻を神と崇め、社を建て、鴻の巢と呼んだのである。

女男松原（上總）

昔、年若い男と女とがあつた。男の名を那賀寒田之郎子と云ひ、女の名を海上安是之嬢子と云つた。二人とも美しい容貌、彼様な男や、彼様な女は、又と二人此世にあるまいと近郷近在の評判であつた。或時處に歌謠ひの集會があつて、其二人は初めて顔を合せる事が出来た。お互ひの喜び様は云ふばかりなく、男の歌つて云ふには、「いやせるの、あせのこまつに、ゆふしで、わをふりみゆも、あせこしまはも」と、女の返歌は斯うであつた。「うしほには、たゝむといへと、なせのこが、やそ

しまかくり、わをみさばしりし」と。それから二人は席の終るのも待たず密と場を外して人目を避けて松原の蔭に行き、胸の思ひを語り合つて、夜の更けるも知らなかつた。此時二人の耳に聞えるのは、松吹く風と、遠い海の波の音。此樂みの盡きる期があらうとは思へなかつたが、聴て鶏が鳴いて東の空は段々明るくなつた。そこで二人は初めて一夜を楽しく語り明したのに氣付いたが若い身の人目を耻ぢて歸るにも歸られず、居るにも居られず、暫くは互に顔を見合はせて、途方に暮れた揚句、二人共其儘松の木に化して仕終つた。男を奈承松と云ひ、女を古津松と云ふ。今も上總に其名を止めてゐる。

河古耶の松 (羽前)

人皇四十三代文武天皇の御代陸奥守として、彼地を治めた中納言藤原豊光朝臣の姫君に、阿古耶姫と云つて容色無雙の才媛があつた。或年、月清き秋の夜、姫君は都忍ばしく高欄近く唯一人手馴の琴を掻き弾して居ると、何處からともなく緑の狩衣を身に著けた氣品の高い一人の若者が現はれた。逢瀬が度重なるにつれ二人はつひ割りなき仲となつた。男は唯千歳山の麓に住む名取太郎と名乗つたばかりで、詳しい素性は物語らなかつた。或夜男は姫に向つて、我命も愈々明日に極つた。君と逢ふ

のも今夜限りであると云ひ捨て、立去らうとした。姫は驚いて男の袖に縋らうとすると、不思議や其姿は煙の様に消えて、残つたのは障子に映る松の影であつた。其翌日の事、洪水に毀された名取川の橋を架直すため、千歳山の老松が用材に伐倒された。松の霊が名取太郎であつたのだ。其後阿古耶姫は、契つた人の形見の松の操を變へじと誓つて、獨身の一生を送り續け、慶雲四年二月十六日と云ふに、眠るが如く成佛した。其遺言に依つて、かの老松の根元に葬り、更に一つの松を植えて標とした。古來詩や歌に詠まれて有名な阿古耶の松は是である。

腰掛の松 (岩代)

奥州郡山の驛から本宮の宿迄は、三里に餘る山路であるが、其街道の右へ當る山の上に、一本の古木の松があつて、枝葉青々と垂れ下り、遠くから眺めると、丁度小山の様にも見える。是れこそ世に名高い天智天皇のお腰掛け松で山は淺香山と云ふのである。昔、天智天皇に仕へた女官に采女と云ふ者があつた。采女は此土地の生れで、少い時から都へ上り、お宮仕へしてゐたが、年經て故郷に残して置いた父母を戀しく思ひ、天皇にお暇を頂き、遙々と故郷へ歸つて來た、處が兩親は夫れから間も

なく此世を去つて仕終つたので、采女は世の中を果敢なみ、我家の古井戸に身を投げて、亡き親の後を追ふたのである。扱天皇はさりとは、知ろし召さず、采女が事を可憐に思召して、是非元通り身の傍近く召仕はんと、態々奥の名所御遊覧を仰せ出され、采女が故郷へ向つてお出ましになつた。懸て目ざす里へお着きになり、采女が身の果を聞き召すと、今更の様に御落膽遊ばされ、暫く此松の根元にお休みになられたから、里人は夫れより腰掛け松と名付けた。又采女が身を投げた古井戸を御覽じ、「淺香山影さへ見えぬ山の井の淺くも人を思ふものかな」との御製を遊ばされた。

姉沼妹沼（陸奥）

陸奥國上北郡に大きな湖水がある。總稱して小川原沼と云ふが、一名を姉沼妹沼と云ふ因縁は斯うである。昔或る公家が勅勘を蒙つて陸奥國へ流された。都に残された妻子は、時折の音信を切めてもの慰めにしてゐたが、後に音沙汰の絶えたのを苦にして、奥方は病の床に就かれた、二人の姫君の心配は一通りでなく、遂に思立つて一人の母君を残し、父君の行衛を尋ねる爲め陸奥へ下つた、彼方此方々々尋ね廻つたが、父君の行衛は分らぬ。今の上北郡三澤村に来て聞いて見ると、數年前迄は

此處に居たが、其後の様子は知らぬと云ふ、姫君達は今更の様に落膽して泣き悲しみつゝも漸く心を取直し、此上は姉妹二手に別れて今一應尋ねて見やうと、右と左へ引別れたが、一足先に立たれた姉君は、世を果敢なんだ爲めか、唯ある小川に身を投げて、底の藻屑と消えた。供の知らせで夫れと知つた姉君は、其儘姉君の後を追ふて、又同じ流れに沈んだ。姉妹の最期場となつた小川は、不思議にも其後次第に擴がつて、遂に大きな沼となつた。けれども其後迄も、姉君の沈んだ所と、妹君の沈んだ處とは判然と境がついて、一つは大沼、一つは小沼となり、今に姉妹の記念を殘してゐる。

嫁が淵（飛驒）

飛驒國吉城郡坂下村と云ふ處に、昔、孝行者の息子があつた女房も迎へずに親の世話をしてゐると、或日何處からともなく美しい女が訪ねて来て、一夜の宿を求めたのが縁となつて夫婦に成つた、女は毎晩川へ行つて、魚を捕つて来ては親と夫に食べさせ、残りは賣つて暮の助けにした。處が不思議なのは、女は『川へ入る處を決して見て下さるな』と呉々も夫に頼んで置いた。男も初の中は見ずに我慢してゐたが、餘り不思議に思つたので、或夜密と跡を付けて、高黍の蔭に忍んで様子を窺ふと

女は水中に飛込むや大蛇の形に變つた。暫くすると鱒を捕つて出て、岩の上に置いたが夫の覗いてゐるのに氣がつくと、又元の女になつて歸つて來た、而して其夜夫に別離を告げ、芋玉を記念に遺して何處へとなく行つて仕終つた。此芋玉は幾ら使つても減る事はない、又此村では此後高黍を作つてはならぬと、別れる時に女が堅く云ひ残したので、村では高黍を作らなくなつた。芋玉は女の云つた通り……幾ら使つても減らなかつた。或日不淨な事に使用すると、夫限不思議な方が消えて仕終つた是が嫁が淵である岸邊の岩の魚の形の凹みは、女が魚を置いた跡だと云ふ。

海女乙女 (越後)

越後國柏崎から西へ二里行くと、青海川の水が絶壁を踏み外して、真逆様に海へ落ちて居る。それが有名なお辨の瀧である。昔、佐渡の海女にお辨と云ふ美しい乙女があつた。柏崎の或若い男と嬉しい情交になつて、毎晩々々、番神崎の常夜燈を目當にし、大きい盃に乗つて海の上を佐渡から柏崎へ通つた。すると戀に酔ふた男の心にも、何時か魔がさしてゐた。「來いと云たどて行かりよか佐渡へ、佐渡は四十九里波の上。」その四十九里もある波の上を、海女の生業をして、海に馴れてゐるとは云へ

纖弱い女の身で通つて來るのは不思議だと疑ひ初めた或夜少女に尋ねると、少女は恥しげに、貴郎に會ひたいと思ふ一念。あのお燈明を便りにして波を渡つて参ります」と云つたが、男の疑心は解けなかつた。不思議な女の振舞、若しや變怪の假りに姿を現はしたのではないかと、何となく恐ろしくなつて來て、翌夜に時刻を計つて密に常夜燈を吹き消した、其時波の上を渡つてゐた乙女は急に方角が判らなくなり、波に揺られて居る中に暴風が起つたので、鹽も覆り、お辨は冷たい死骸となつて瀧の下に打寄せられた其時からお辨の瀧の名は起つた。

黄金の鶏（長門）

厚東判官は長門國厚狹郡に住つてゐたが、小供がないので、金銀寶玉を集めるのを唯一の樂しみにした。或時判官は家老の者共に、各々自分の家の寶を持出させ、それを城の廣間に並べて品定めをした。すると兼村と云ふ家老は、寶物がない代りに男女十四人の子福者だったが、其日は子供を寶物とし、着飾らせて城へ連れて行つた。其美しさ可愛らしさ、判官自慢の黄金の鶏や銀の花瓶なども蹴落され、判官は面目を失つた。夫れから判官は寶物を見向きもしない。如何にしても子供が欲しいと

中山の観音様に願を掛けると、間もなく一人の女兒が生まれた。處で若し観音様の御利益で子供が出来たら、十一になれば屹度お返しすると云ふ約束だったが、愈々生れてみると、返すのが惜しい。併し年月は用捨なく経つて子供は早や十一になった。判官は子供に別れるのが悲しく、果ては観音様を怨出し、或日中山へ参詣して、尊像に向つて矢を放つたすると、間もなく城は敵に圍まれ、遂に判官の一家は滅亡して仕終つた。今でも夜半には城跡に戈や劔の音が聞え、曉近くなるごと、城に埋つてゐる黄金の鶏が鳴くと云ふ判官に射られた観音は腰が曲つてゐる。

榮華の跡（因幡）

昔、因幡國の湖山と云ふ處に一人の長者があつた。先祖の威光を笠に着て、傍若無人の振舞が多かつた。或年の田植時、五月雨の空は珍らしく霽れて、今日は愈々長者の小田の田植だと言ふので、里の乙女は白手拭に赤い襷と甲斐々々しく朝早くから長者の家へ集つた、長者は幾千町の田を今日一日に植ゑて仕終へと命じた、無理な觸出しに皆の者は驚いたが、急に乙女の人數を増し、田植唄も勇ましく取掛つた。長者は高殿へ上り、満足の色を浮べながら其有様を眺めてゐた。併し如何程一生懸

命に働いても、幾千町の田が一日に植ゑ終へるものでない。今四五町と云ふ處で日は早や西の山の端に傾いた。此時高殿の上に立つてゐた長者は、沈まんとする日を招いた。日輪も長者の威に恐れられたのか、靡かれる儘再び中天に舞戻つた。そこで残る田植も滞りなく済んで、長者の望みは遂げられた。其夜長者の夢には何が入つたであらう？。夜が明けると共に長者は急いで高殿に現はれた、扱昨日植ゑた幾千町の田はと見ると、こはそも如何に影も形もあらばこそ、見渡す限り渺茫とした一面の湖水と變つて居た。今鳥取市の西にある、水清き湖山の池が夫れである。

山姥 (出雲)

昔、都に一人の姫君があつた、人並外れて身の丈が高かつたので、誰れも娶る者はなく、美しい花の顔容は、たゞ徒らに老い行くばかりであつた。姫は悲しさに遣る方なく明暮れ神佛を頼まれると、或夜の夢に神が現はれて、出雲國枕木山に待つてゐる男がある、それを訪ねて頼めよと告げられた。姫は喜んで取る物も取敢えず、枕木山さして急行き、訪ねる男の在家を求めたが、如何しても分らぬ馴れぬ山路に日は暮れて、今は一足も運び得ず、唯ある松の根に腰打卸して思案に暮れてゐると、

忽ち怪しい物音がして、凜々しい扮装の男が現はれた一夜は夢の様に盡き、夜が明けると共に男は早くも姿を隠して、又行衛知れずになつて仕終つた。姫は餘りの事に世を呪ひ人を怨んでもう二度と再び人の世には出まいと、深く心を決し、人跡の絶えた深山の奥に日を送つて居たが何日の間にか身が重く、懸て月満ちて玉の様な男の兒が生れた。此兒が成人して後に名を擧げたのが、誰知らぬ者もない金時である。山姥は此姫の成れの果であるさうだ。今でも松江邊では、山姥は人の前で、物を食はず、人の見ぬ間に、數日分を一度に食ふとも云つてゐる。

那智の瀧壺 (紀伊)

花山法皇が那智のお山へお入りになつて、三年の間一心不亂に苦業なされた。明日は都へお歸りにならうと云ふ日に那智の瀧壺から龍神が現はれて、感應の験にと、一個の如意珠と、水晶の念珠一連と、海貝一枚とを献上したので、法皇は大いに喜ばせ給ひ、寶珠をば岩屋に、念珠をば千平院に納めて地鎮となされた。それより苦業第一の者が之を傳へられ、代々秘授して後世に至つた、其中でも海貝は、九つの孔のある珍らしい寶であつたから、大事に秘めて誰一人手を觸れなかつたが、自然

に瀧壺の底深く沈んで仕終つた、處が此九つの孔の貝を食べると、何日迄も年を取らず、瀧の水を飲めば齡を延ばすと云ふので、或時白川院が此事を聞き召され、斯る珍寶を瀧の中に沈めて置くのは残念である、早速取出させよとの詔勅があつたので水泳の達人を選んで瀧の底に入らせ貝を捜させた。暫くすると水潜りは出て來たが、貝は持つて居ない、而して恐るゝ云ふには、『貝は確かに御座います。有るにはありますが、直径が三尺許りもありまして、如何しても持ち上げる事が出来ません』と、貝は其儘になつて、今も瀧壺にあると云ふ。

乳母櫻 (伊豫)

昔、伊豫國温泉郡朝美村に徳兵衛と云ふ情け深い名主があつた。一人娘のお露は眉目形麗しく、父母の寵愛も深かつたが、十五の春を迎へると不圖した風邪が元で重い病となり、此世の息も絶えなんと云ふ危篤に陥つた。兩親の歎きは云ふ迄もない殊に付添ふ、乳母の心勞は譬ふるに物なく、我命を縮めても必らずお助け申さんと、同じ村の西法寺にある不動尊に祈願を籠め、三七日の間斷食してお露の病氣平癒を祈ると、其効驗にや醫者も匙を投げた程の重病人も、一日々々と快方に向ひ、遂に

全快した。一家内の喜ぶ間もなく、今度は乳母が病の床に就き主人夫婦お露の手厚い介抱にも關はらず、命は且夕に迫つた。乳母は夫婦を枕元に呼び、今迄の恩を謝した上、「一つのお願ひは、お嬢様が御病氣の時妾は不動様に心願を籠め御平癒の曉には櫻樹を一株境内に植奉りませうと、誓ひましたから、妾の亡き後には何卒櫻樹を植ゑ、妾もお思召し御寵愛下さらば、嬉しく成佛致しまする」と云つて死んだ。夫婦は其遺言の如く西法寺に櫻樹を植ゑたが、不思議にも毎年二月十六日には花を開き花は丁度乳の形をしてゐる。二月十六日は乳母の死んだ日である。

百椀と、ろ（日向）

日向國東臼杵郡北方村の荒谷と云ふ處で、延岡町からは西へ三里、熊本街道に沿ふて、百椀と、ろと云ふ淵がある。荒谷を貫く谷川が、凄じい勢で瀧をなして落ちる處で、其周圍は樹木生茂り、晝尙ほ小暗い物凄さ、淵は左程大きくはないけれど、深さは底知れずで、龍宮迄續いてゐると云はれてゐる。何日の頃、如何して左様なつたかは知らぬが、昔から荒谷では、客なごをして椀が要る時には此淵の主が、百人前だけの椀は貸して呉れたのださうな。前以つて淵の岸へ行つて頼んで置き、必要

の日に借りに行くとき、若々しい美しい女の手がすうつと淵から
浮み出て腕を渡して呉れたのである。處が或時愚かな男が借り
た腕を受取る使ひに行つた。噂に違はぬ美しい手が腕を持つて
現はれた。男は腕を受取る時に其手を引張つてみた。美しい手
は激しく振へて、如何にも驚いた様になつて中へ引込んだ。而し
て其後はもう貸して呉れぬ様になつて仕終つた。夫迄は此谷川
では不淨の物を洗ふ事は堅く禁められてあつたが、腕を貸さな
ければ關はぬと云つて、何んでも洗つた。すると其時から其村
に限つて、一軒に一人づつ、片輪者が生れる様になつた。それ
も淵の祟りだと云ふ事だ。

鯡の祖神（渡島）

昔、北海道渡島國江差町に一人の老女がゐた。何處の生れで
何處から來たのやら、誰一人知つた者はない。處が此老女不思
議な神通力があつて、世の中の事何一つとして云當てぬはな
つた。或年の二月初の夜、鷗島から怪しい光が發したと思ふと
橋を渡した様に海を越して老女の住家を射た。すると老女は急
いで鷗島へ渡つて行つたが、聽て白い水の入つた一つの小瓶を
持つて歸つて來た。老女は濱邊へ行つて、其瓶のの水を海へあ
けると不思議や今迄青々としてゐた海の面が、忽ち米の研水の

色に變つて、幾萬と數へられぬ鯿が、群を造つて濱邊へ集つて來た。そこで老女は漁師に網を引かせたが、磯邊には見る間に鯿の山が出来ると云ふ有様であつた。これからは此海で鯿が捕れる様にして遣る、それで暮を立てたら、未始終困る事はないと漁師へ教へて、老女の姿は見えなくなつた。皆は親を失つた様に悲んで、草を分けて尋ねたが遂に分らなかつた。今迄の住居へ行つてみると、唯神様の像らしいものが、一つ祀つてある許りであつた。土地の者は其像を其儘姥が神と崇めて祠を建て春秋の祭をする事にした。又鯿の祖神とも稱へられてゐる。

大正五年九月十八日印刷
大正五年九月二十六日發行

著者 木村恒

發行者 小川正次

東京市本郷區駒込千駄木町四十九番地

東京市赤坂區福吉町一番地

印刷者 中村幸吉

印刷所 中村印刷所

「戀の傳説」
定價五拾五錢

發行所	東京駒込 千駄木町四九
電話	下谷六九七九
振替口座	東京九五五六
發行所	東京駒込 千駄木町四九

四 方 堂

▲ 参版見よ之好評見よ之の歓迎

▲ 都新聞評 疊に國民紙上に「お丁」と題し連載し破天荒の好評を博せしもの
 ▲ 女一人の福な男が最愛の妻を亡くし後妻を求めんとせざるまで起れる七人の
 ▲ 殊に濃やかなる興味の折と葛藤は虚子ならでは書けぬ細緻な筆致をもつて讀者
 ▲ 六朝の濃やかなる興味の折と葛藤は虚子ならでは書けぬ細緻な筆致をもつて讀者
 ▲ いて痛切に味ふ悲人の子を残して妻に先達れたる中年の男が後妻を迎ふるに就
 ▲ 召使を中々に戀ふ夢見と獨身の老嬢の性格など面白く書分けた長編小説で先
 ▲ 生りの物中情熱に弄られる老嬢の性格など面白く書分けた長編小説で先
 ▲ 國新物中情熱に弄られる老嬢の性格など面白く書分けた長編小説で先
 ▲ 表は起す、然しやして純乎たる文藝の權威を備へたるは近時文壇の異彩と云ふも過
 ▲ 言に於て儼然とて上著者の秀麗細密なる筆は各異りたる七人の女が取り巻きて幾多の波瀾
 ▲ 萬朝報評 藤會て都下某新聞に掲載して好評を博せし物、愛と慾より生ずる七
 ▲ 人の女子一葛藤を叙し、柔軟な著者の筆致は殊に女性心理描寫に適し一般女子
 ▲ 大方の士女に推奨する。の心理に共有を感じたる所あるならん家庭の好讀物として

女七人に男一人

高濱虚子 先傑作 石版十度刷艶麗無比
 平福百穂 先畫 定價九角 送料八錢

□ 家庭の改良に注意する人は讀め □

月刊 家庭之友 雜誌

定額一冊三十錢 郵税共七錢五分 前年分一金 半年分五錢 一年分十錢

□ 家庭之友の特色 □

- ◎ 家庭を楽しくするにはどうするか
- ◎ 家庭計を裕かにするにはどうするか
- ◎ 家庭を平和にするにはどうするか
- ◎ 家族を達者にするにはどうするか
- ◎ 子供を賢く育てるにはどうするか
- ◎ 一人前の主婦や主人となる修養
- ◎ 家庭教育上に必要なる事項の研究
- ◎ 健全にして高尚なる趣味の養成
- ◎ 處世に必要な新智識の研究
- ◎ 社會に起る主なる出来ごとの説明
- ◎ 高尚にして面白い家庭讀物の提供

△松崎天民先生序 白河夜舟生著 口繪 遊女はな奴(としひろ畫)

好評
三版

花街情話 紅燈ロマンス

△定價七拾五錢送料八錢
△中版ボール入美本一冊
△表紙櫻紙模様頗る美麗

.....班 一 容 内.....

- △花魁中の花魁
- △今様蘭蝶物語
- △五人坊主呪咀の釘
- △淪落の淵苦界の海
- △伊達模様姉妹襦袢
- △毒に燃ゆる火の唇
- △色變り吉原雀
- △新怪談綾川心中
- △七百人の身上話
- △艶魔三千花の吉原
- △初見世の其夜まで
- △艶吉原入門
- △籠の鳥花魁修業
- △手練手管四十八手

△羅綾錦繡を纏へども哀れに悲しきは遊女に極まる。紅粉青黛に装へども怖しきは亦遊女である。戀なさけ、意地や張りや八重の辨、涙の蜜、血汐の匂ひ、麗はしき花、さあれ葉裏を翻せば手練の刺手管の毛虫、隠れて恐ろしき花、げに遊女は薇蓋である。眺めて美しく觸るれば刺さる本書は東都浪花を始めとし各地代表的狭斜の巷より最も波瀾曲折に富んだ、現存せる花魁十人の情話集にして實に紙上に建られたる遊廓である。紅燈緑酒の嬌聲、翠帳紅閨の艶語は幽婉華麗の筆と相俟つて一頁毎に戀の天地を開き、一句莞爾、一行恍惚、怪しき夢魔の魅力に陶醉し、魂天外に飛ぶ感がある。面白くして而かも危険がないのは此の書物に遊ぶ事。

「氏源舎田」るをてせが騒を界書讀

柳亭種彦作歌川國貞畫 全四冊 定價二圓八十錢送料十六錢

繪本 修紫田舎源氏

△菊版大和綴極彩美本
△忠實精巧なる口繪及び挿畫は全然原本の通り
△各冊定價七十錢送料八錢

△本書は原文を假名雜り文となし、読み容い様に今様に組み總べて振り假名をつけてありますから、婦女子の方にも面白く讀むことが出来ます。
△挿畫は原本十數通を集め其の内から最も完全なものを選び一々念入れに墨さしをして製版したものですから坊間にある原本には似もつかず鮮明に出來て居り殆んど毎頁に入れてあります。

江戸時代ほど複雑でまた花やかな時代はなかつた。そしてそれが末期になるほど高調に達した。その美しい爛熟した世の渦巻の中に生れた柳亭種彦の美しい筆は綾錦のやうな色々の美しい物語を作つた。その中で最もすぐれ、最も心血を注がれたものをこの修紫田舎源氏となす。當時の浮世繪畫家として鳴つた國貞がその畫をかいてゐる之の美しい人情本は日本の寶と云つても過言でない。江戸趣味の復活せんとする時に當つて此の書の再び世に出たことはうれしい事である。(講談雜誌評)

△小山内薫先生新著（著者が第二の長篇傑作）

最新刊

小説 告白 目

大好評 忽ち再版

- △中判特製函入美本
- △定價壹圓送料八錢
- △その時代の作者肖像入

小學校、中學校、高等學校時代に於ける著者が偽なき口

マンズの告白を見よ。

十九世紀といへば歴史的な古い話のやうに聞えるが、未だほとぼりのさめない、著者が少年時代、明治三十年前後のことである。新らしい女などの囁きさへ聞かれなかつた、その時分の學生と今の學生との間には餘程思想上の相違があつた。單に「純潔」を夢みてゐた學生男女間の内部生活の實際を描いたのが本書である。作者の言を借りて言へば「平凡人の平凡な夢」である。此の偽のない事實を骨子として何處までも當時の學生社會の有様をそつくりその儘物語らんと努めてある。作者の軽い筆でいかにも鮮かに描かれ讀者をして感興を禁じ能はざらしむ。

興味横溢せる無類の珍書！男女學生の好讀み物！

漱石蘆花樗牛獨歩四大家の智慧競べ

好評三版

現代 文豪 地上 聖 語

吉田常夏編
小形四五〇頁
箱入美本
△定價九拾錢
△送料六錢

時事新報評、漱石、樗牛、獨歩、蘆花四氏の文中より警句雋語、人を啓發すること多き短文二千章を選び之れを處世、道徳以下十五篇に分類せるもの、さすがに現代文壇の巨擘たる人々の名句なれば一言一句悉く讀者を刺戟する光明たらざるはなし。近來の好出版といふべし。萬朝報評、漱石、蘆花、樗牛、獨歩の著作中より天地の眞理を道破せる名句のみを拾集し來つて處世、道徳、社會、人間、戀愛、自然、女性、家庭、宗教、藝術等十五種に分類したるもの、各家の特色は一目瞭然たり、此の種の著作中最も體を得たる編纂とす。

廿世紀 處世の 活教訓

—— 容内書本 ——

- △處世觀
- △道徳觀
- △社會觀
- △生活觀
- △人間觀
- △人情觀
- △家庭觀
- △戀愛觀
- △女性觀
- △自然觀
- △宗教觀
- △死生觀
- △藝術觀
- △學藝觀
- △雜觀

是れ悉く四大文豪の達觀也。悲哀と煩惱に苦しむ煩ふ者は來れ、泣く者の涙を拭ひ、落膽せんとする者に力を添へ、迷ふ者の指導者となり、此處に安心立命の經典を授け、立志處世の活教訓を垂れ、生活人生に偉大なる意義を示さむ。

新刊

世評一斑

冥想
哲學
無
絃
琴

十牛手摺木版畫十一枚入
三六版クローヌ美本
特製函入
定價八十錢送料八錢

外國語學校教授 村井知至先生著 和田垣博士譯英文十牛頌 △齋藤松洲畫伯畫

時事新報評 著者が心鏡に映じたる靈的閃光を其儘筆にせるものにて何れも斷片的なるが其内容に至つては幽揮雄大萬人の胸底に儼存する或者に觸るゝと同時に宇宙を包擁する見えざる靈氣にも觸れたり蓋し著者は既成宗教の傳道者の如く徒らに其の言説を弄する事なく無言の裡に最も顯著なる傳道を行ふものなり。

雄辯評 制度愈々具はりて精神次第に空しからんとする現代の吾教育界に於て學生を人間として教育する事を以て本領とする著者が冥想沈思の間に其心鏡に閃き來れる思想を筆述せるもの、不平あり呪詛あり煩悶ある人は先づ一讀せよ一貫せる思想はこれ著者一人の宗教なり此言こそ吾人の聞くべき處なり。

東京日日評 主として思想界精神界に關聯し過去數年に互り隨時隨所著者の心琴に觸れたる感想にして無明の大道其の他二百數十篇を收む省察に資すべき好文字多し。

262
182

終

